

# 赤道越えて3カ月

## 敷田麻実君(高知大3年)が挑戦

「客言出たならマングロを這って——高知の基幹漁業のひとつ、獲快なマングロ漁業はいま、魚価低迷で憂うつな日々が続いているが、昨年、一人の高知大生がこの世界の生の姿を知りたいとマングロ漁船に乗り組んだ。赤道を越えて三カ月の操業航海——。厳しい海の男の奮闘のなかで、大学生は何を学んだか。「ふれど」では今週からしばらく、この大学生の手記を通載。マングロ漁船の現場をかき見たい、と思っ。

この大学生は、高知大学農学部栽培漁業学科三年、敷田麻実君(30)。石川県加賀市の出身で、県立大塚寺高を卒業して高知へ。そのころは魚を食べるのも苦手だったが、次第に漁業に傾倒、漁業の現場を知りたい、自分の手で生きた仕事をしたと昨夏、県水産試験場でアルバイト勤務。続いて九月から十二月まで室戸市のマングロ漁船「第7玉宝丸」に乗り組んだ。

家業は加賀の機物業で長男だから、両親は船に乗るなど絶対反対だったが強行突破した。最初の寄港先のグアム島から「船に乗ったよ」と国際電話すると両親は喜び上ったが、もう出てしまった後だから仕方ない。両親は「来年はしっかり勉強強めに仕送りたい」という奮し文句でケリ。

結局、ことしは留年決定。三年をやり直すことになったが、将来は「水産関係で生きたい」という好青年で「皆さんに厳しいうまく漁業の現実を知ってほしい」といふ。

# 大学生、マングロ船に乗る



マングロ船に乗った敷田君

## 遠洋漁業を自分の体で

「おい大学生、だいぶ悪感と違にはむやみやたらに「そん」なうたろ——」とどんでん上がった。その「枝組」の処理に追われながら「はい、全然違うたです」そう答えるのが精いっぱい。なまツメをはがす、潮がふれ、手指のしびれ、切り傷と、全身、痛いとこぼには「と欠かない。乗船日記」

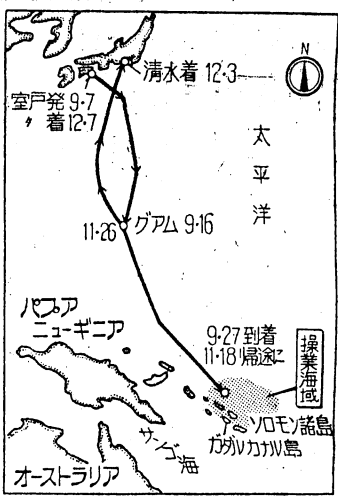
「おい大学生、だいぶ悪感と違にはむやみやたらに「そん」なうたろ——」とどんでん上がった。その「枝組」の処理に追われながら「はい、全然違うたです」そう答えるのが精いっぱい。なまツメをはがす、潮がふれ、手指のしびれ、切り傷と、全身、痛いとこぼには「と欠かない。乗船日記」

さしたる考えもなく入学した裁か。しかし、それにしては小さい。形を支払われる。だから、生活のため無理をしても働かねばならないのだ。

また、人間関係のむずかしさも想像を絶する。狭い船の上で毎日同じ顔を突き合わせて生活する。

漁師の給料は陸上のように決まった額を定期的に、というものでない。動いた実績に対し幾らという。形を支払われる。だから、生活のため無理をしても働かねばならないのだ。

また、人間関係のむずかしさも想像を絶する。狭い船の上で毎日同じ顔を突き合わせて生活する。



### 出港前夜

「親、五五五、一、一、一、三カ月、母わたしが五十五年九月三日。」

# 大学生がグアム船に乗る。

敷田 麻実

②

「オイラの船は三百、昔、おやじもきて働いた海は緑のインド洋——スピーカーのポリウムがいっぱい上がった。三百の歌が港中に響く。自分と言いついで、  
 「もう出てしまったんだ。戻れないんだぞ」  
 一生懸命、

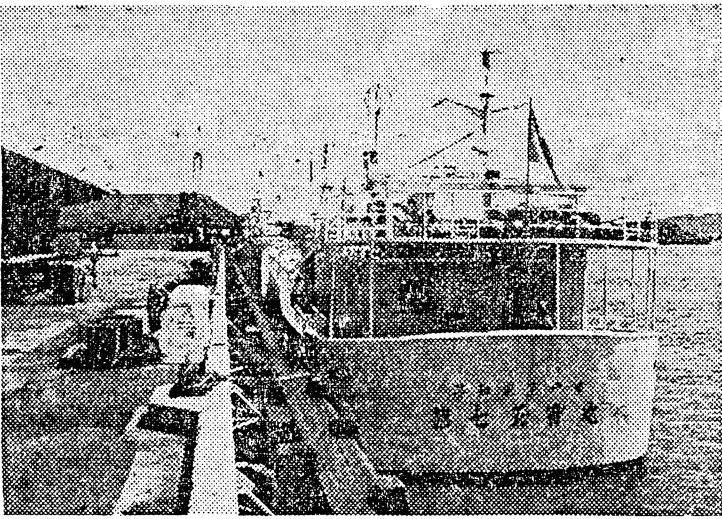
## 航海

「第七宝丸」の出港には五十人ほどの見送りが集まった。しほの別れを惜しんで十五人の船方が船に乗り組んだ。船方の子供たちか、小さい子供たちが懸命に手を振っている。色とりどりのテープがとも（船尾）から流れる。出発だ。  
 船は次第に速度を上げる。港がすうっと遠のいていく。  
 「ああ、出船の光景、いいもんだなあ」——僕は少しセンチになって海を見つめていた。突然、  
 「甲板するぞー」  
 甲板長の声が響いた。甲板を洗うぞ、ということだ。僕は棒ずりを手に甲板へ。持つ手は

力を入れながら僕は、  
 「もう出てしまったんだ。戻れないんだぞ」  
 用が済めば、船方はさっさとハウスへ入って寝てしまおう。日本近海は荒れるから、用もなさい子供たちが懸命にのんびらしていいのは本職の漁師でも気が悪くなる。体が慣れるまで横になる。天気図を見て、台風を避けるがら船は一路南へ。ほ

かにも季節風なを恐ろしいものはあるが、なんといっても台風

## 自動操縦、一路南へ



南へ向かう第七宝丸（途中寄港のグアム港で）

船といえは巨大なラット（舵）が堅っていて腕つぶしの太い男がそれをクルクル回すなどと考えるかもしれないが、それはひと昔前の話。今ではジャイロコンパスによる自動操縦だ。他の船や島が近づかない。

一番こわい。こいつにつかまったらひとたまりもない。船は慎重にコースを選ぶ。  
 航海中は、甲板員はブリッジへ、機関員は機械場へワッチに上がる。僕は甲板員としてブリッジへ上がった。

朝六時、夜が明けたか明けぬかのうちに起こされる。なにがなんだかわからず、まさかこんな早朝から仕事などとは考えてもいなかった僕は顔を洗う間もあらはこそ、手際よく食事をし、階段を上がる船方を横目に、大あわてでご飯をかき込んだ。  
 甲板では仕事は分業。少いむだもなく進められてゆく。合間には酒や女の話を花が咲く。どれもこれも思わずカラッと笑いを誘われる内容だ。船という一種の閉鎖された社会では冗談を飛ばし合ひ、カラッとすることがなよりのストレス解消策。これも大船な生活の一部。  
 南に下るに従って、海はなごくなる。水平線にわく雲も、縦横、自在にのびるその姿と変化の激し、奇抜さで、ここが日本をほるか離れた南洋であることを思わせる。室戸を出て二十日、  
 「第七宝丸」はニューギニアの二百マイル内に入った。操業開始まであと二日。  
 （高知大農学部三年）

# 大船を操る

敷田 麻実

内地を出て二十一日目。第七  
玉宝丸はニューギニアの二百ワ  
内に入漁料を払って入り、いよ  
いよ操業が始まった。

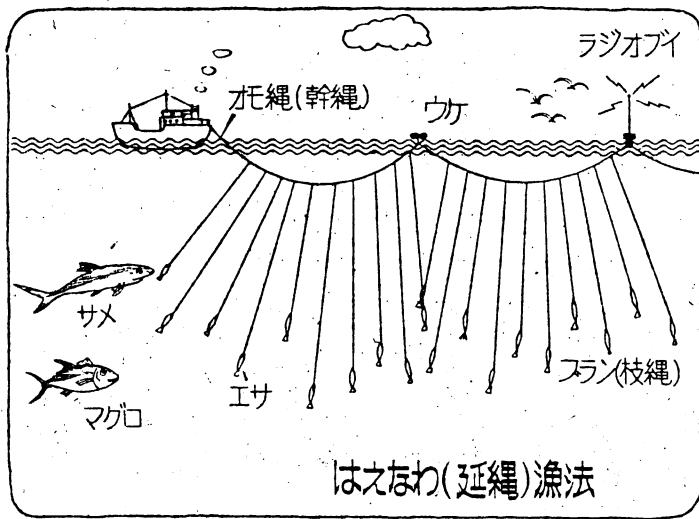
昭和五十五年九月二十八日未  
明。僕は投縄(とじょう)

## 操業(一)

スタンバイのフザ  
ーに起こされ、眼  
い目をすりなが  
ら慌たたく甲板  
へ飛び出した時  
光景を忘れられ  
ない。まだ暗い海  
面がうらやまの  
表情とほろりして  
変わった厳しさに  
らむ海の男たち。明けたし  
た東の空が鮮やかなオレンジ色  
に色づいたことは覚えてい  
るが、あとは忘れてしまった。投  
縄機からおもなわ(幹縄)がヒ  
ュンビュンうなりながら、あわ  
だつ海面へ飛び出してゆく。男  
の戦場の幕開けだった。

マンロを釣る代表的漁法は延  
縄(はえなわ)漁法だ。その言  
葉通り百から百三十センチに  
及ぶ長さのおもなわに、二千本  
前後のフザン(枝縄)をきつけて  
海中へ投下してマンロを釣る。  
が飛んでゆく。

## 延縄を100キロ流す



からウケまでを一枚と呼ぶ。ま  
た二十枚入れるごとにラジオア  
イやランブを自印につけてお  
く。そして百八十枚を入れ終わ  
ると、最後には、オンド、とい  
う自印の浮きをつけて延縄を流  
し、船はその近くを漂泊し、後  
からウケまでを一枚と呼ぶ。ま  
ろになるまで揚げなわが始まる。  
今度は逆にゆっくり船を走らせ  
ながらラインホーラー(揚縄機)  
で延縄を揚げてゆくのだ。フザ  
ンを一本一本はずしながら、イ  
ヨ(魚)が食っていけば船の上  
へ引っ張り上げ、解剖してマイ  
ナス五十度の冷凍庫へ入れてい  
く。ときにはサメも食いついて  
いるが、こまめにはヒシだけを取  
って捨てられる。

この揚げなわ作業が普通で十  
二時間、大漁のときは十四  
五時間かかる。つまり揚げ終  
わるところは真夜中の二時、三時  
というわけだ。次にはすぐ投縄  
が待っている。揚げなわは交代  
制で毎日というわけではない  
が、なかなか激しい労働であ  
る。

操業は満船になるまで続く。  
せっかくな投縄しても漁がなかつ  
たり、海のギャンク、シャチに  
獲物を横取りされたりすること  
もあり、こんな場合は適水(マ  
グロに最適な水温の漁場へ移動  
すること)をする。その日だけ  
は仕事がなく、疲れた体を休ま  
せる日。だから適水を船方は女  
んな待ちわびているが、実際に  
は十日も二十日も連続で操業  
し、適水は忘れた(と)やっ  
てくるだけである。

(高知大農学部三年)

そのおもなわに、七秒間隔で  
鳴るフザーを合図に、フザンを  
つける。サンマやムロアジをえ  
さとして付けたフザンは、これ  
もヒュンビュンと海面へ。  
フザンを十本つける(深さを  
調整するためにウケと呼ぶ二つ  
玉の浮きを入れる。これを十本  
釣り(十本つけ)といひ、ウケ  
やがて、赤道直下の太陽が頭

# 大学生マダロ船に乗る。

敷田 麻実

マダロ漁船が延縄(はえなわ)で釣る魚はいろいろなものがいる。しかし、マダロは最近、めづり漁獲高が減ってきている。千八百本の針を

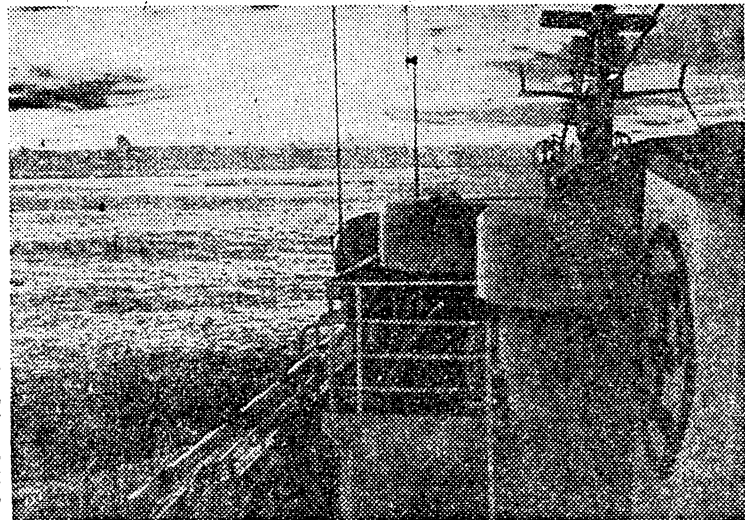
まずマダロの類だが、ホンマダロ、ミナミマダロ、キハダ、メバチ、ヒンナガの五種である。このうちホンマダロ、ミナミマダロはその胸びれの下のトロとして有名だ。キハダ、メバチは赤身の刺し身でうまい。ヒンナガは胸びれがピンと長く伸びている、別名をトンボ

## 操業(二)

とも呼ばれる。シーキンなごのかん詰め(とされるのがこの種類)。

【第7玉玉丸】の漁場だったニューギニア近海にはキハダ、メバチ、ヒンナガの三種がいる。ミナミマダロ、ホンマダロはもっと寒い海にいる。そのマダロたちを追って日本の漁船は世界中の海で操業している。もはや日本のマダロ漁船が延縄を入れたいのは南太平洋と北極海だけだ。

## キンギョ、ロッキードも



南洋の夜明け。東の空が輝いて、絵のような美しさだった

食らいついてやろうという面構えで、冷酷そのものという憎らしい目つきだ。しかし、そのサメのなかにも一つだけ変わったのがいる。ネズミと呼ばれるオナガサメだ。その名の通り、長さ三メートル

を鋭くとがらせて突き出した突は皆さんもおなじみだろう。背びれが群青に光るバシヨウカシキや、思わず「老人と海」を連想させた三好もある巨大なメカジキ、マカジキ。乱暴者のサメ、カジキにまじって優雅に大海原を泳ぐやつもいる。キンギョと呼ばれる赤マンボウ(マンダイ)だ。一見ぐらいたが、凶鑑なその写真よりもっと赤い。紅色で平たくてまさにキンギョ。

ロッキード。もいる。本名はイトマキエイ。青暗い海の中で宙返りを打って白い腹を見せたりして面白い。

また、今度の航海では一度だけ海ガメが釣れた。量一層はあろうかという大物。背中に数匹のコバンサメを促して上がってきた。愛きょうのある海のじいさんだ。フロン(枝縄)の先のワイヤを切つてやると、うれしそうに泳ぎ去って行った。

やっかいなのは海のキャンク、シャチ。せつかく延縄にかかったマダロをバクリと横取りする。なかなか賢いやつで、釣り針の部分だけを食べ残してマダロを平らげていたりする。これに見込まれたら大変、しつこく追っかけてくるから漁場の変更を余儀なくされる。

(高知大農学部三年)

独特のアンモニア臭を放ち、まきながら、恐ろしいほどの生命力を見せる。弱ったところを頭をナタで割られるが、それでもまた暴れて、これでもか、これでもかとナタを何度も振り下ろしてやっとおとなしくなる。しかしその表情は、すきあらば

カジキ類も特徴がある。上あ

さるにすくのはサメであ

のはすきまじい。驚快そのもの

さるにすくのはサメであ

# 大学生の口笛を聴く

敷田 麻実

6

「えらそうなことを言っマ  
グロ船に乗ったが、これはとん  
でもない所へ来た」——第一回  
目の操業が終わった時、正直そ  
う思った。親分にも言われる。  
南方の夜明

## 操業 (三)

「おい大学生、だ  
いふ思惑と通うた  
る——。どんど  
ん揚がつてるブ  
ラン(枝縄)の処  
理に追われなが  
ら、何をやって  
一人前じゃない自  
分が何度も情けな  
く思えた。

ただ、激しい労働で腹だけは  
減る。毎食バリバリご飯は食  
る。一人前なのは胃だけか、と  
苦笑いをする日々。

そんななかでも、延縄にかか  
つてくるいろいろな魚やスケ  
ルの大きい海や空の変化、操業  
の合間にフツとひと息つく瞬間  
があった。

投縄が進むうちに夜が明け始  
める。東天があやしい動きを見  
せ、わきあがる雲の彼方から、  
中天高い明けの明星へ向けて数

条の赤い光が群青の空を突き抜  
けてゆくと、大海原がサーッと  
つてくる。

夕暮れの  
ながめもな  
んとはいえ  
ない。まる  
で絵が写真  
にでもなり  
そうなる上  
等な景色が、  
それも毎日  
違ったもの  
が、すばら  
しく広が  
る。

西の半球  
がまるで映  
画館のスク  
リーンのよ  
うにオレン  
ジに染まり  
水平線には  
積雲、空高くには積積雲。それ

らがあかねに、群青色にとその

## マンセン、キトニツク



激しい操業でつめはボロボロに。しかし、陸に戻った今  
は「男の勲章」

キラと光り、群れる。ちよと  
秋空に数限りなく舞う赤トンボ  
のようで、内地の秋を思い出し  
たりした。

操業は四十回を超えた。とに  
もかくにも、七十ノ入る「第  
七玉宝丸」の冷凍庫をいっばいに

がんばるわけだ。  
ちよとそのころだった。繩  
が上がり、ようやく眠れると思  
った時、ふと見上げた夜空に南  
十字星が見えた。初めて気づい  
た南十字星——キラリ輝く異郷  
の星は美しかったが、それより  
も疲れて眠たくて、あたふたと  
ハウスに駆け込んだことを覚えて  
いる。

そしてついに操業 四十九回  
目。「第七玉宝丸」の七十ノの冷  
凍庫は氷点下五〇度でカチンカ  
チンに凍らせたマグロでいっば  
いになった。大きな氷の塊が山  
と積まれて目の前にある。

最後のフイが揚がると、さっ  
そく後片付けが始まった。「つ  
いに帰れる」と思う。体は疲  
れ果てているはずなのに、その  
ことを全く感じない。この三方  
月間、あれよあれよで本当に早  
かった。帰るとなると早かった。  
その間向をしたのだから、自  
分でもあきれてしまっ。

船方たちの顔も、一仕事終え  
たという充実感と安心感で、輝  
くように明るかった。

マンセン キトニツク  
「第七玉宝丸」は室戸へ電報  
を打った。船首をグルリと回し  
て日本へ。船脚がすぐる速く  
なったように思った。

(高知大農学部三年)

色彩を変えながら、やがて静か  
にやみの幕が下りてくる。東の  
空には輝く月が……  
何十万匹ものトビウオの稚魚  
が船のライトに誘われて、船の  
周りを舞ったこともある。長さ  
五拵ほどの稚魚がライトにキラ  
と

# 大学生がマグロ船に乗る。

敷田 麻実

⑥

海の生活では食事が唯一の楽  
しみでもある。そのため、少し  
でも口に合わないものがあると文  
句が出る。みんなのおう盛な食  
欲にこたえるものを毎食用意す  
るコック長の苦勞もまた大変な  
ものだ。

ぜい寝酒としてかんビール一本  
ぐらい。航海中でも船方はあま  
り飲まない。酔く酔う程度。大  
酒飲みがいやがられるのは陸も  
沖も一緒で、人に迷惑のから  
ぬ程度に、適当にやっている。  
内地のニュースも毎日ちゃん  
と入ってくる。新聞が電送され  
てくるので不自由はあまりな  
い。もちろん普通の新聞一枚分  
ぐらいのダイジェスト版だが、  
ちゃんと朝刊、夕刊が出る。船  
方たちもちょっとした暇を見つ  
けて目を通し、内地を遠く離れ  
たニューギニア沖で、王や長島  
の引退がひとときの話題になっ  
たりしたものだ。

漁船員の船内生活について、  
何カ月も海の上で男ばかりの暮  
らしをするのだから、これは雑  
で汚いと考える人  
がいるかもしれない  
が、マグロ船の  
船方たちは陸の人  
が考えるよりはる  
かにきれいな好き  
だ。

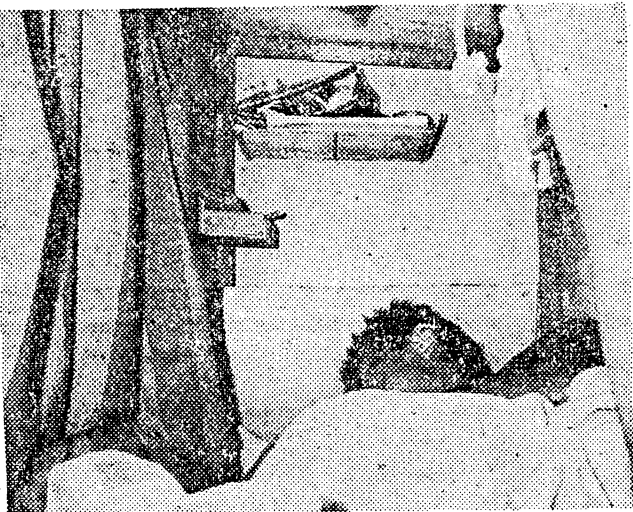
## 船の暮らし

僕が乗船前に聞  
いていた話では、  
仕事が終われば一  
分でも多く眠るた  
め、体が汚れてい  
ようがカッパスポ  
ンをすり下しただけハウス  
に寝転び、すべたいびきをかき  
だすといふことになっており、  
これは相当なものだと内心案じ  
ていたが、この話は全く違っ  
ていた。いや、正確には  
この話も二十年以上も前の話  
で、今のマグロ船は……

船が上がり一日の操業が終わ  
ると、船方ははなっそく椅子を使  
い、シャンプーと石けんで頭か  
ら体のすみすみまできれいに洗  
う。もちろ  
ん真水は貴  
重品なので  
海水をよな  
のだが、そ  
れでも十分  
きれいな  
る。

洗たくも  
まめた。一  
日の仕事で  
汚れた物は  
すぐ洗う  
し、着替え  
もよくす  
る。けっし  
て上等のも  
のを着てい  
るわけでは  
ないが、み  
んな、こぞ  
れいにしている。  
食事もちよと昔前と比べると格

## 海の男はきれい好き



狭いながらもわが「ハウス」。足元には日用品の格納  
庫がある (第7玉宝丸で)

段によくなったらしい。昔はカ  
シキといつて新前は見習い兼コ  
ックとして向航海か飯炊きをさ  
せられたぞうだが、今ではちゃ  
んと食事専門のコック長が乗っ  
ている。「玉宝丸」でもレストラ  
ン仕込みのコック長が毎食、上  
等のご飯を食へさせてくれた。  
くらう余裕などない。酒はせい

もうひとつ、漁師といえは二  
升びん片手に目をキラキラさ  
せ、花札などをやっている姿を  
思い浮かべる人があつたかもしれ  
ないが、これまた考えを改めね  
ばいけない。  
操業中のマグロ船では大酒を  
飲んではいけない。イメージとし  
ては悪く思われがちだが、実際  
は違ふのだということがしみじ  
みわかりつつ、僕と「第7玉宝  
丸」は太平洋のまたたきの中にい  
た。

(高知大農学部三年)

# 大學生マダム日記

敷田 麻実

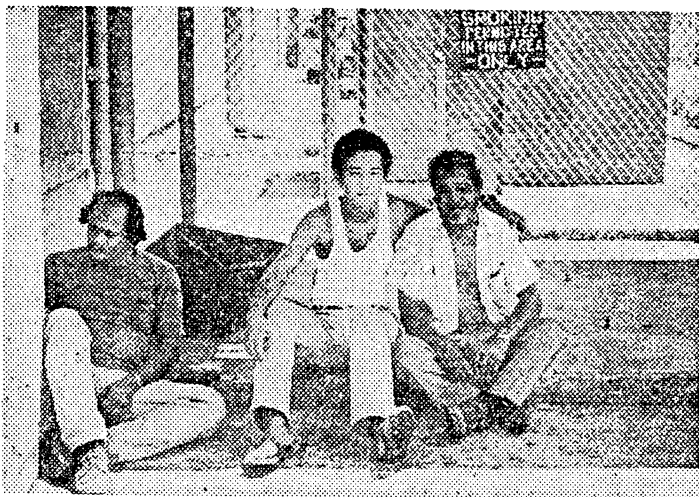
長く苦しい海での生活だが、楽しみも少なくない。そのひとつが外地入港である。

## 海の楽しみ

動かぬ大地をしっかりと踏めるといふ喜びとともに、久しぶりにつらい仕事から離れられるという解放感がある。沖では一匹でも多くの魚を釣るために一生懸命だった漁師たちも、ここでは精一杯、憂さを晴らす。

「第7玉宝丸」は行きと帰りにそれぞれ給油のためグアム島に入港したが、グアムが近づくとき、あす着くか、あさってか、船方たちはその日を心待ちにし、しきりに気にする。仕事の合間の雑談もっぱらこれが話題で、昔の外地での自分の活躍や、今度は何をしようか、土産はどうか、などといったことがよく話されるようになった。

## 港外地き浮き心



グアム港で荷役のおんちゃんたちと記念撮影

んで笑いながら出て行く人、映画見物に行く人、さまざまの上陸風景。このときはたった一晚、遠洋へ一年半も長航海する船でも二、三カ月に一度、長くて三日の外地入港だが、操業中と比べ

「ウンやっぱり外国だ」と実感する。はてしなく青い海にサンブと飛び込み、外地での水泳もたっぷり楽しんだ。

グアム島は日本からの新婚旅行のメッカである。街でも熱々のカップルを見かけた。あの立派なホテルの前の海で楽しそうにはしゃぐ新婚さんは、同じその島が、命がけてマグロを釣って来る海の男たちの唯一の楽しみとなつて知っていることを知っているだろうか。

このほか、沖での単調な生活に刺激を与えてくれるものに沖台電報がある。前にもちょっと触れたが、客言の漁業無線局を経由して内地の家族や恋人とやりとりする。手紙や電話に比べれば味けないカタカナの並んだただの紙切れ一枚だが、身も心も疲れた時にもう一通は、いっぺんで気分を変え、心を浮きたたせる。

ハウスの中で寝ころんで、無線局長から渡された電報を繰り返し繰り返し読む時のあの気持ちにはなんともいえない。

「イツカエル ゲンキマイル カ シラセテホシイ ハヤクア イタイ」

ガールフレンドからの電報を僕も何度も読み返した。

(高知大農学部三年)

出る典型的アメリカ人——でっぷり太って腹の出た沿岸警備隊の役人が制服姿でやってきたのを見て初めて、ここはアメリカだ、と思った。

検校を済ますと、皆、三々五五ひっかけたのだろうか、土きけ

々町へ上がってゆく。機関員だると月とスッポン、天国と地獄ほこの差があるのだから、ウキウキするのをもっともた。僕も勇躍、南の島へ。港の労働者のおんちゃんたちと、たゞたゞしい英語で話をしてみて、

(高知大農学部三年)

# 大學生マクログロに乗る

敷田 麻実

8

飛行機にして飛ばしたマクログロ乗りの話もあるが、それは昔話。皆一様に陸の生活にあこがれる。女房、子供と何カ月も離れて暮らす、こんなつらいことはない、という。

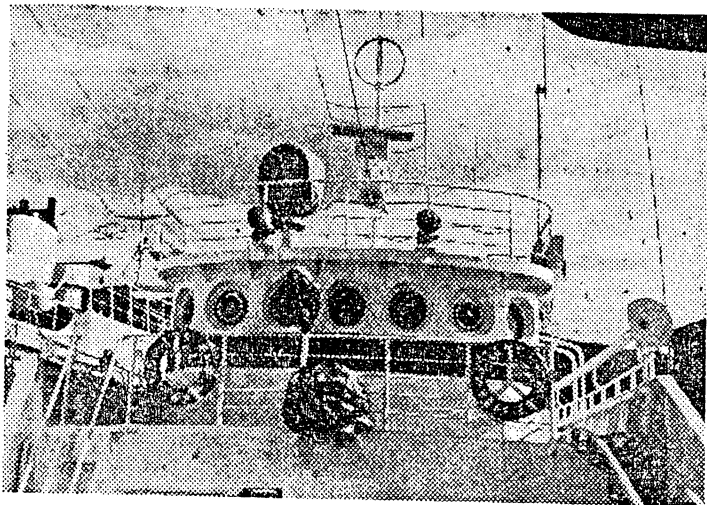
しかし、なぜそれでも漁師を

こがれば膨らませつつも海から離れられないのである。  
【第七玉宝丸】は検疫待ちで一泊し、翌日清水港ではクレーンでマクログロを鈴なりに下げて荷揚げが始まった。三カ月の苦闘もたった三時間の荷揚げで終わった。次々に冷凍庫に運び込まれるマクログロを見ながら、このマクログロが食卓に並ぶ時、食べる人は命がけて釣ってきた漁師のことを恐らく考えまい。もうどん詰まりまできているマクログロ船。そこに生きる男たち。漁業王国・日本、というが、だれがいったいこの危機を打開するの

## 内地へ

最初に見たのは頂に白く雲をかぶった富士山だった。富士を見て戻ってこれた、と実感した。たった三カ月だったが、やはり懐かしい内地である。そのまますま富士山を清水港へ走る。マクログロを二田でも高く売らなければならない。市場の相場を見て一番高い港へ水揚げする。\*一田達

## 魚価低迷、だれが打開



荒波にもまれつつ奮闘する第七玉宝丸——航海安全と豊漁を祈る

【第七玉宝丸】の三カ月——船頭、甲板長、機関長、コック長、船方のみんなに大変お世話になった。この航海は僕の人生で忘れられない体験になった。この三カ月の日々を必ずなかに役立てようと思う。また、水産を学ぶ者としていい加減なことほできない。  
【第七玉宝丸】——マクログロ業界に寄せる波は荒いが、航海安全と豊漁を祈っている。

(高知大農学部三年)

おわり

代の値上がりと相まってマクログロ船を次第に圧迫している。資源は減り、航海日数は延び、油代が上がり、魚は高く売れぬでほしいことなした。魚価低迷の原因は複雑なものがあるが、大商社の一船買などの影響が大き

楽しみもない沖で毎日苦しい操業を繰り返す。漁師は人間のやることじゃないぜよ、学生さん。操業が始まって何日かたって甲板長がそつもらした。昔、高知のキャバレーで二万円札を紙

楽しめない沖で毎日苦しい操業を繰り返す。漁師は人間のやることじゃないぜよ、学生さん。操業が始まって何日かたって甲板長がそつもらした。昔、高知のキャバレーで二万円札を紙

知のキャバレーで二万円札を紙海にとりつかれている。陸にあ